



太宰府天満宮宝物殿・文化研究所主管

味酒 安 則

86期神

日本文化のかけがえのない遺産、その保存と伝承に神社が果たした役割は計り知れない。わが国の有史以来、連綿と続く祠官たちが、命を賭して守護してきた社殿をはじめ建造物、神宝や什宝などの有形文化財、神事や行事さらに「歴史的仮名遣ひ」や各地の伝統的著名などの無形文化財、社を形成する樹木などの天然記念物等が、神社の歴史とともに今に継承され、日本文化として現代に応答していることは確かである。そして、これらの形を通して、美しい日本の心を伝えるとともに、さらに後世へ継承させていくことは、この時代を生きる私たちの責務であるといえる。

文化、文道の祖神、学問の神と仰がれる菅原道真公を奉祀する太宰府天満宮は、草創以来一千一百年の歴史を有し、菅公の遺愛品の御神宝をはじめ、その間に神前に奉納された人々の信仰の証といえる約三万点に及ぶ宝物が伝えられている。宝物は古くは什宝、什物と呼ばれ、歴代の祠官は、それが信者の真心の形であるがゆえに、我が身に代えても守り続けてきたのである。宝物とは、崇敬者の心の一部が形になったものと考え。ここに、関が原の合戦でひとり自刃した西軍の武将大答刑部少輔吉継が奉納した二面一対の懸鏡がある。自分の名とともに家族すべての名を記したこの宝物から、吉嗣の心濃やかな天神信仰を垣間見る気がする。菅公の遺愛品の佩刀「毛抜形太刀」、御真筆「五言絶句双幅」(背景)を拝見すれば、道真公の御心の万分の一を汲み得た喜びとともに天神信仰の確かな手応えがそこにある。天満宮の歴史の中で、どれほど菅公の遺愛品が人々を勇気づけたかは言うに及ばない。

太宰府天満宮西高辻信貞前宮司の言葉に「神社は過去も現在もそして未来も地域のカルチャーセンターである。」がある。確かにそうだと思う。神社に於ける社殿を、当代の技術と文化情報の発信施設と仮定すると、絵馬殿は現在の美術館にあたる絵画の展示施設といえ、文化情報の公開の役割がある。また、文庫は図書館で文化情報の集積施設となり、宝物殿はまさしく今の博物館である。太宰府では、宝物殿を除けばすべて江戸時代までには存在し、地域のカルチャーセンターの機能は十分に備えていたといえる。

宝物殿も昭和三年(一九二八)の開館で、当時、神社の宝物を常時一般公開することは大変先駆的なことであった。神社の社殿や宝物等の文化財を保存管理して行くなかで大きな課題がある、まず、文化財である社殿をはじめ建造物が、参拝の場として拒むことなく日常的に存在していることである。したがって、人為的なものから天災に至るまで様々な危険と対面している。だから、平素の防災意識と修理補修が必要となってくる。

次に、文化財の公開である。公開は劣化を招くという考え方があり、それは確かな面もあるのは事実だ。しかし、公開を前提とすれば、公開に堪える形ということで、調査や補修が行届くようになる。神社で継承された文化財は、我が国の歴史、伝統、文化等の理解のために欠くことができないものである。また、同時に、将来の文化の向上発展の基礎をなすものである。文化財を大切に保存して次世代へ継承するとともに、合わせて積極的に公開・活用を行うべきだと考える。ここで、保存と展示公開と調査研究の三要素の調和が重要となってくるのである。さらに、戦後の生活環境の変化のなかで、急速に地域の連帯が失われ、神事や行事に残る伝統芸能をはじめ多くの無形文化財の伝承が困難な状況下にある。しかし、昨今の物的豊かさより心の豊かさを求める人々の意識と、「地方の時代」の到来とが相俟って、地域文化、伝統文化の見直しや、特色ある地域づくりの核と、その価値観に変化が見られている。今こそ、博物館をはじめ文化に携わる院友学芸員が中心となって、我が国の優れた伝統文化を発展させていく時である。

加えて、神社に保存された文化を継承・発展させるには、それを支える優れた人材が必要で、優秀な院友の学芸員を積極的に養成せねばならない。我々日本人が日本文化に誇りをもち、その文化を培った祖先に感謝し、生きがいとなるよう、連綿と続く院友学芸員は、声高に国の文化財保護行政に意見してもよいのではないだろうか。文化財は単なる無機質のものではなく、現代にも我々に語り続ける生きもので、決して眠らない存在であると私は思う。



太宰府天満宮宝物殿

太宰府天満宮創始、味酒安行(うまさけ やすゆき)公より43代目の社家に生まれる。1978年國學院大學文学部卒業、太宰府天満宮奉職。81年大宰府町(市)文化財専門委員、92年福岡女子短期大学非常勤講師(民俗学)、98年筑紫女学園大学非常勤講師(博物館学)、現在は2003年福岡女子短期大学客員教授(博物館学)、04年福岡県立美術館協議会委員、06年九州国立博物館文化財保存修復施設運営委員会副委員長。